法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

<特集随想>ゼミ合宿の思い出

崎山，保

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文學誌要
(巻 / Volume)
51
(開始ページ / Start Page)
120
(終了ページ / End Page)
122
(発行年 / Year)
1995-03-24
(URL)
https://doi.org/10.15002/00019810

とを気にしていらしたのではないだろうか。たとえ片方の足だけとはいえサンダルを履いたくだけた格好では、講義を受ける学生たちに失礼で申し訳がないと考えていらしたのではないだろうか。せめてもう片方の靴で、精一杯の礼儀を尽くされたのだ、今はそう思っている。

先生は、沖縄文化の源流をたずねるため、また、沖縄と、島嶼という地理的な類似条件をもつ国々に生まれた歴史や文化の比較を試みるために、日本各地はもとより、韓国、ハワイ、フィジー、オーストラリア、ヨーロッパとさまざまな地へ出掛けておられる。調査、研究のかたわら、その土地土地のおいしい物を食され、文化、芸術にふれられ、空気そのものまでも楽しまれているごようすである。そのリベラルな先生が、片方に靴、片方にサンダルをお履きになった。身を装うことに関して、相手に失礼がないようにと考えられるお人柄なのだ。単に自分の好みに合ったよい物を身に纏うのではなく、相手に対して礼を尽くす、相手を大切にしたお洒落。こういうお洒落もあるのだと気付かされた装いであった。

片足だけに靴、のその日は、卒業記念のアルバムに載せる写真の撮影日でもあった。

（はまだ　やすこ・旧姓　中江・一九八九年博士課程修了）

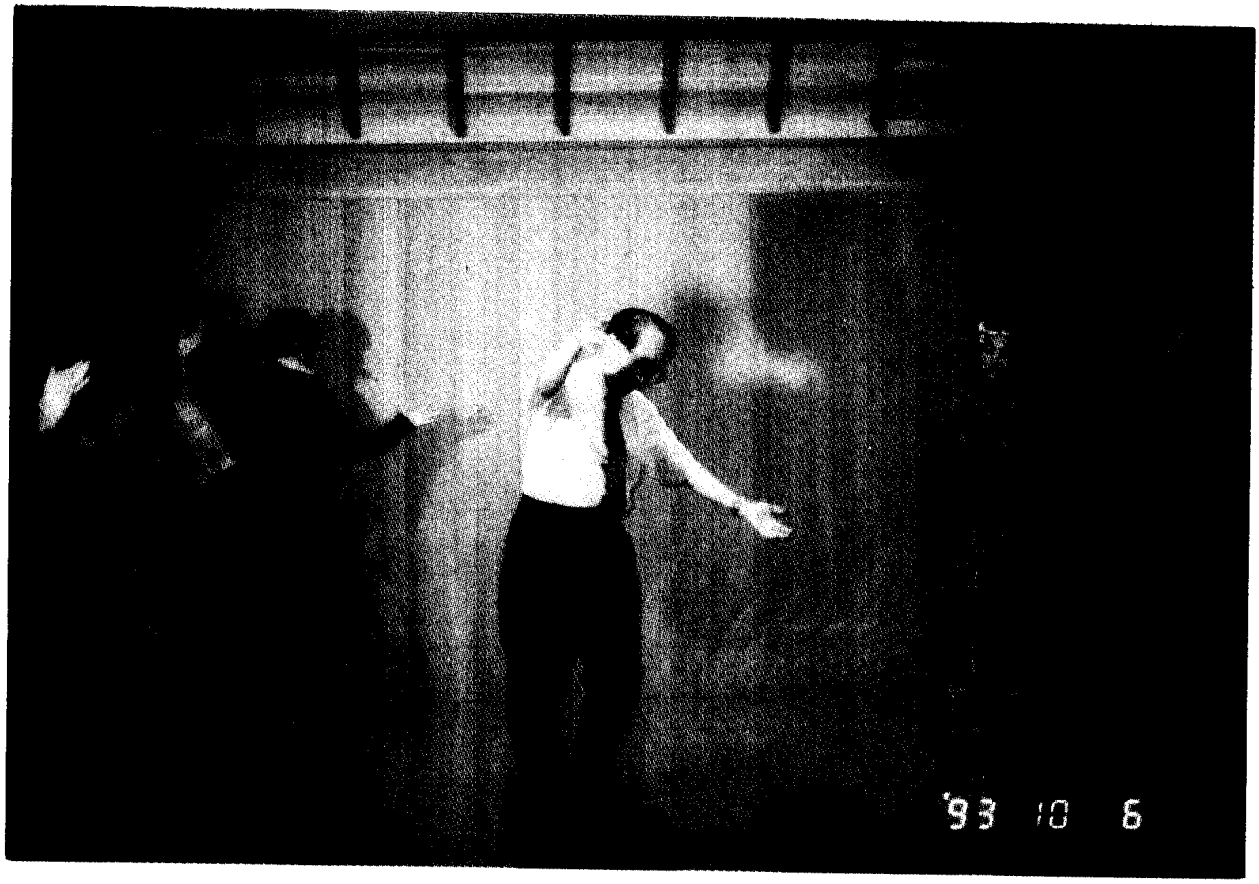
ゼミ合宿の思い出

崎山　保

外間ゼミの名物の一つに、毎年沖縄現地で行っているゼミ合宿がある。今年で十四回を数えたわけだが、この合宿は法政一・二部、大学院のゼミ生だけでなく、その他の外間先生の講義を受講している学生をも含め、総勢百人あまりが参加する他に類をみない多人数の合宿であり、まさに外間先生を囲んでその教え子たちが一堂に会する年に一度の大イベントである。

今年度は、去る十月に四泊五日の日程で行われた。前半は沖縄本島の首里〜与勝半島〜本部半島に視点をあてて沖縄の祖神アマミクの足跡を尋ね、後半は宮古島で宮古島の歴史の拓け方、特に北の池間島・大神島・狩俣の構造的な関わりについて学習した。

十月といっても、沖縄では半袖で十分過ごせるし、宮古島においては三十度を超える暑さで日焼けするほどだったのだが、そんな厳しい暑さの中でも外間先生は精力的に活動され、私たち学生に懇切丁寧に一つ一つの遺跡を解説された。



その宮古島での行程中に、外間先生からいろいろな宮古島の現地調査の際のエピソードをお聞きした。

先生が初めて宮古・狩俣を訪ねられたのが、昭和三十九年の夏で、その時に「祖神ニーリ」を採録されたそうだが、その採録時、古老が茶で喉を潤し、黒砂糖を舐めながら謡う姿と、先生の恩師である金田一京助が、アイヌの古老に、酒を少しずつ注ぎたしながらユーカラを記録した話が重なりあったこと。

首にタオルを巻き、作業衣姿で労働――味噌作り――のお手伝いをして、神女達と少しずつ親交を深めていったこと。

当時は道路も整備されておらず、宿から狩俣までの道のりを往復五～六時間かけて毎日、真夏の暑い盛りに徒歩で通われたこと。

その時先生は髭をはやされていたそうだが、その時分、宮古島で髭をはやしているのは、牧師か精神に異常を来たした人だけだったそうなので最初、島の人達から不審がられたこと。

このようなエピソードを先生は懐かしそうに話された。

私は、外間先生から先生御自身のお写真を何枚か拝見させていただいたことがあるのだが、先生が髭をはやされていた頃のお写真は、残念ながらまだその機会がない。しかしながら、私の予想では、伊波普猷先生のようなダンディーなお顔であると思うのだが…。

私はここ五年ほどこの合宿に参加し、沖縄本島、周辺離島の伊江島、浜比嘉島、今回の宮古島と外間先生とご一緒させていただいているのだが、私が一番思い出深いことは、先生は、どの御嶽・御願でも敬虔かつ慈しみを込めて必ず拝まれてから私たちゼミ生に案内・解説をされることである。先生のそのお姿と様々なエピソードは、沖縄学の学問と共にゼミ合宿のたびに私たちの心の中に染み渡っているように思

う。

もう一つ、私がゼミ合宿で忘れられないこととといえば、昨年、琉球舞踊鑑賞の折に先生がカチャーシーを踊られたこと。そして、その踊りがお上手だったこと。

さすが〝外間先生〟と思った。先生は、かって東京都の国体メンバーの野球選手であり、また、空手八段のスポーツマンでいらっしゃる。

私が先生にカチャーシーもお教えいただきたいと言ったら先生は何とおっしゃるだろうか。（さきやま　たもつ・大学院修士課程二年）

外間先生の横顔（一九七七～一九八六）

波照間　永吉

先生との出会いは、たしか一九七五年の秋頃のことと思う。当時琉球大学の研究生をしながら、進路についてなお思い悩む日々の続いていたころである。たしか、新里幸昭さんに紹介されて琉球大学の方言研究クラブの部室でお会いしたと思う。勿論先生のお名前はその前から存じ上げていたし、その何年か前には、外間先生の伝言を携えた竹内重雄さんとも会っていたから、初めてお目にかかることではあったが、それほど緊張していた記憶はない。そのとき何をお話ししたかは今はもう定かではないが、多分、八方塞がりの状態にあった僕の進学問題について、お聞きいただいたように思う。何故なら、その後すぐに東京の先生から、励ましのお手紙を頂いているからである。その手紙には「君に進学する気持ちが有るのであれば、自分は幾らでも応援の手をさしのべられます」という趣旨の言葉が記されていた。この手紙を貰って僕の道は決まった、といっても過言ではないと思う。その翌年一年をかけて、僅かではあったが東京生活の資をつくり、一九七七年三月末、上京ということになった。

一九七七年当時、外間先生の研究室には竹内重雄さん、田畑千秋・中村博子さんが在籍し、都立大学大学院から多和田真一郎さん、学習院大学から荒川さち子さんらがゼミに加わって、活発に議論を展開していた。そこに、西表宏、大城學君と僕とが聴講生として参加するようになったのである。

その頃は皆がまだ青年であったから、時折沖縄出身の大学生たちと野球の試合をすることもあった。先生の「戦歴」をまだ伺ってもいなかった僕は、あまり期待するでもなしに、そのことをお伝えした。ところが、なんと先生は羽根木公園球場に着くや、ユニホーム姿に変身